

あきやまさねゆき

【秋山真之からの手紙】

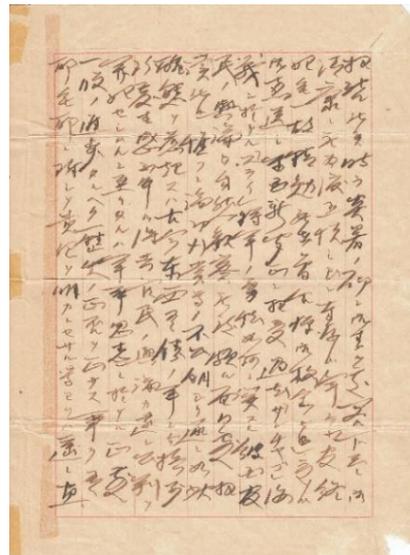
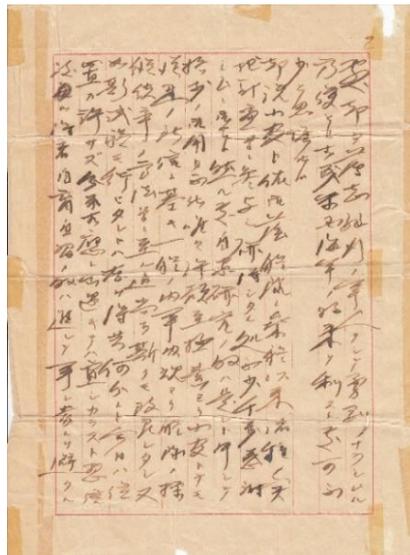
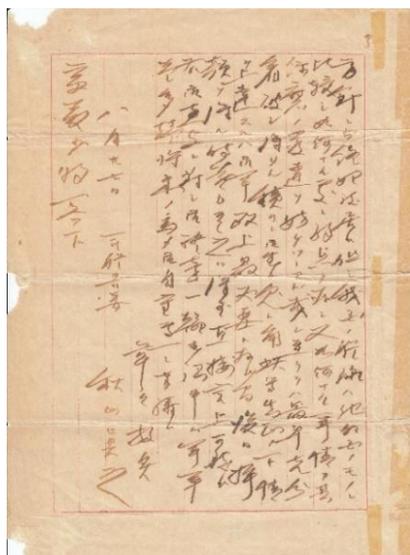
「まことに小さな国が、開花期をむかえようとしている」の一節で始まる司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』。9月8日から、この作品を原作としたNHKスペシャルドラマが再放送されています。

このドラマの主人公である秋山真之が實に宛てた手紙が、今回ご紹介する“イッピン”です。真之は、慶応4年（1868）伊予国松山（現在の愛媛県松山市）に生まれています。兄は「日本騎兵の父」といわれた秋山好古^{よしふる}。俳人の正岡子規は幼い頃からの友人でした。

真之は大学予備門を卒業後、海軍兵学校へ入校し、明治23年（1890）に首席で卒業します。實は安政5年（1858）生まれ。海軍兵学校を明治12年（1879）に卒業していますので真之にとって實は10歳年上の大先輩となります。

当館には真之が海軍次官であった当時の實に宛てた書簡が2通残されており、その内の1通を常設展示しています。實は、真之が観戦武官として視察し、報告書を作成した「サンチャゴ・デ・キューバ海戦」に関する記事が載った米国新聞を真之に送ります。そのお礼を述べた明治34年（1901）8月のこの書簡からは、實への深い信頼や将来の海軍を担うに相応しい人であろうといった尊敬の思いが感じとれます。實も同様に真之に注目し、高く評価していたのでしょう。

その後、真之は日露戦争において、東郷平八郎連合艦隊司令長官の下で作戦担当参謀として多くの作戦を立案し、海軍でその存在が大きく認められていきます。



【現代語訳】

拝啓、今は炎暑の季節ですが、閣下におかれましてはご健康に過ごされておりますことと存じ上げます。私の方は、ずっと勉学に勤しんでおりますので、はばかりながらお氣になさらないでください。

御恵送の米国新聞を拝受しました。過去の「サンチャゴ」海戦において「スライ」將軍（※）が勇敢であったか臆病であったかに関する米国官民の輿論も知ることができ、すこぶる面白く拝読いたしました。（中略）

さて、私もおかげさまで、艦隊に乗艦以来、様々な実地計画などに参加し、見識を得たところが少なくなく、この上ない感謝の気持ちでございませう。しかし、自分で行う研究の外はこれといって特別な任務もなく、ただただ極めてお恥ずかしい限りです。（中略）

我国の艦隊は外国のものに比較し、いかなるところに弱点をもち、また、いかなる事情がその練磨の発達を妨げているのかという点については、十分に把握しているつもりです。とにかく、これらの情報を報告することが、軍政上重要と考えておりますので、後日、お目にかかる機会がありましたら、直接申し上げます。

右の新聞の御患身に対しお礼かたがた手紙をしたためました。軍事は、ますます多岐にわたりますので、将来のためにお体を大切にしてください。草々敬具

八月二十七日 軍艦吾妻 秋山真之

斎藤少将閣下

※アメリカ海軍の提督ウィンフィールド・スコット・スレイ

秋山は、サンチャゴ・デ・キューバ海戦を観戦している。